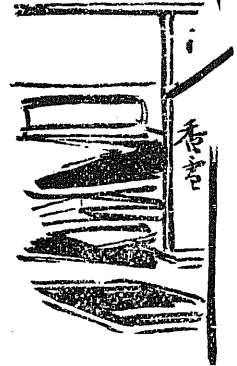


第十卷第八號



うるほひ

うるほひ

人は誰れでもである。ましてや柔い子供の心を友とする我等にとりては、絶えず心の『うるほひ』がなくてはならぬ。燥いた、涸れた、かさくした心は子供の相手となるに適當のものではない。しかも我等の心はまたしても、此の『うるほひ』が失せ易い。事務に忙しいものは、ついで機械の様な心になつて、摩りへらされた革の様に粗れて来る。研究々と、餘りにその方に熱すものは、日盛の街を駆けあるく犬の咽の様にいらくしい心になり易い。まして、我慾にあせるものはそうした心は共に子供のよき友でない。

此の頃の夕べ暁のうれしさは、うるほひある天地のうれしさである。一日の灼くる暑さに、疲れ果て倦んどつくした人の心のみか、草にも木にも蘇きかへるうれしさは夕べの『うるほひ』である。起きぬけの庭

石つめたく、ふつくりと露をふくんだ垣の朝顔、

さては見なれた小草雜木にも、心ゆくうれしさは
曉の『うるほひ』である。『うるほひ』ばかりにこ

そ夏の人活きてゆく。

涸れ燥いた草に罅裂の入り易い様に、涸れ燥いた
心に傷が出来易い。先づがさくと氣短になる。

物事はしやぎ切つて沁々とした興味がなくなる。
斯うした心から、つい、すげない物言ひ振りも起

り易い。つれない態度も起り易い。われにたい一
滴の『うるほひ』だにあらば、おのずからなる優し

さも湧かうものを。

○うぬくしい子供の心の、ふつくらとした處は
其の滋味である、潤味にある。いはしつとりとし

た朝の花の様に、漂ふ如き夕の星の様に、『うるほ
ひ』多き美しさである。新らしいものには皆此の

『うるほひ』がある。清いものには皆此の『うるほ
ひ』がある。さなきだに陳り易く、穢れ易く、『う

るほひ』の失せ易い子供の心を、われ等の燥きて
粗き無情から少しでも早く涸らしては濟まぬ。

夜の間世界がうるほふ様に、人の心も憩ひから
『うるほひ』が出る。憩ひとは必ずしも業を休むと

いふことのみではない。勝れた人は、手足、頭腦
の忙しい中にも心の憩ひ、心の『うるほひ』を絶え

ず蓄へることが出来る。つまり心の餘裕である。
併し平凡の我々には、矢張り多少の休みを機會と

して憩ひ出来る。其憩ひから、思ひもよらぬ『う
るほひ』が心に出来る。その『うるほひ』から、我

れ相應の美も出る、善も出る。丁度砂埃干ききつ
た巷に夕立のした後の様に、丁度泥土きたない渚

に潮の満ちた様に、いはし心の世界が一變する。
○折角の此の夏休み、人いろくに最善の利用法

の多い中にも、兎に角くわれ等は此の『うるほひ』
の恢復と蓄積がし度いと思ふ。高き山、清き流に、

つきせぬ自然の『うるほひ』を汲むもよからぬ。
古今東西の君子哲人に就て、その豊なる心の『う

るほひ』を學ぶもよからぬ。所謂體ゆるやかに心
ひろく、『うるほひ』多き朝夕を重ねて、九月再び

子供等に會ふ時『先生は、夏前よりも百倍やさし
くなられた』と、子供心に感じて貰ひ度ひと思ふ。